

2017年1月

社会学評論編集委員会

委員長 渡辺秀樹

公募特集の応募について

前々期および前期の社会学評論編集委員会では、「公募特集」が合計3回、企画、実施されました。その成果を受け継ぎ、今期も通算4回目、さらに5回目となる公募特集をおこないます。公募特集が組まれた経緯と投稿者にとっての利点を、以下にあらためて示します（前回の告知文と同様です）。

社会学評論の通常の「特集」は、テーマと執筆者を編集委員会が検討し、論文は依頼にもとづき寄稿されます。こうした方法によって、社会学評論は、時機を得たテーマの下、実績のある会員の研究成果を広く共有する場を提供してきました。しかし、他方で、編集委員会の企画する力を超えて新たな魅力ある特集を組むことのむずかしさもありました。また近年、日本社会学会は、若手支援を重要な活動の領域としており、編集委員会も若手支援の可能性を探りました。こうして2期前から、通常の特集と異なる幅広いテーマ設定を特徴とした公募特集を組むことになりました。

投稿者にとって公募特集の利点は4つあります。第1は、掲載号があらかじめ決まっていますので、エントリー選抜を通過した掲載候補者は、掲載可否が定まる時期の見通しをもちながら査読を受けられることです。この点は、通常の投稿論文にはない魅力です。第2は、掲載可否の判断基準は通常の投稿論文、特集と変わりませんが、公募という性格上、上記した掲載候補者は、原則として掲載を前提とした査読を受けられることです。第3は、通常の特集と同様、執筆者はそのテーマに関する研究者として本会員、本誌購読者に周知されることです。第4は、公募特集の他の収録論文との相互参照を通じて、編集委員会の当初の企画の力を超えて新たな潮流や視座をうみだしうることです。

もちろん、公募特集は若手のみに限定した企画ではありません。本誌のよりいっそうの発展のため、実績ある会員からの投稿も歓迎します。

今期の公募特集は、①「社会学における歴史分析の現在」（275号、2018年12月刊行予定）②「社会階層・不平等と家族」（276号、2019年3月刊行予定）。斬新で創造性あふれる内容の執筆エントリーを期待しています。

2つの公募特集テーマの概要

公募特集①「社会学における歴史分析の現在」

近年、社会学の領域でも歴史的なデータを素材とした研究や、「歴史社会学」をタイトルに採用する論文が増えています。そこに込められている思いも、じつにさまざまだと思います。そもそも社会学が近代社会への変容を問うところで誕生したことを踏まえれば、研究者が歴史意識をもつことは自然だともいえるでしょう。しかしただ素材を歴史現象にさだめ、あるいは過去に関する資料やデータを利用していけば、歴史社会学であるという理解はすこし安易だといわれかねない。いまは忘れられている歴史に注目し、社会的事実の見過ごされた起源や経緯のもの語りを掘り起こしたり、未検討の埋もれた資料にあらためて光をあてたり、さまざまな課題を背負った人生の語りを分析したりする実践が貴重な貢献でありうることは認めたい。なお論者がその研究を通じてなにを社会学として明らかにし、これまでの知見や理論に対して貢献することになるのか、研究主体の問題設定そのものも価値が問われるからです。

その意味で今回の公募特集では、自分が取り組んでいる主題のなかで「歴史」を焦点化することに光をあてる機会を設けたいと思います。具体的な資料や現象の分析にもとづきながら、社会学において歴史性を分析する意義や効用をどう立ち上げるか、そうした理論的・実践的な課題へのチャレンジを公募テーマの核にしたいと思います。

今回の企画でいう「歴史分析」や「歴史社会学」の意味する範囲を狭く考えないください。当然ながら、学会の専攻分野一覧が設定している社会史や生活史、社会学史等の分野に限定されるものではありません。文化であれ、福祉であれ、家族・地域であれ、環境であれ、社会運動であれ、あらゆる専門の個別領域にひらかれ、できごとの記述であれ、経験の分析であれ、言説の批判であれ、多様なスタイルをはば広く含みこむものです。個別の専門領域での対象の主題性から、社会学研究の方法意識の特質にいたるまで、さまざまな水準でテーマ化するものとして捉えています。

具体的な主題や問題はそれぞれの論者が自由に設定すればよいと考えていますが、編集委員会によるエントリー選抜の際の主な規準は、以下の通りです。

- (1) 社会学として「歴史」を主題化する問題設定が明確なこと
- (2) 具体的な資料・データ・現象の分析にもとづく論考であること
- (3) 社会学における歴史分析としての学術的な特色や独創的な点が示されていること

公募特集②「社会階層・不平等と家族」の概要

2000年代の「格差社会」論にみられるように、社会階層と不平等の問題は広く社会的な関心を集める領域となり、社会学の貢献できる不平等問題も拡大・深化している。特に、家族（あるいは世帯）領域と社会階層・不平等との関連について関心が高まり、従来の階層・移動研究では必ずしも中核的ではなかったテーマについても本格的な研究が進められている。

この背景には、少子高齢化に代表される家族の変容や労働市場の構造変動があることは間違いないが、加えて良質な社会調査データの蓄積を挙げることができるだろう。社会学領域を代表する社会調査プロジェクトである「社会階層と社会移動全国調査」(SSM 調査)は、1955年から2015年まで7次にわたる調査が実施され、データ・アーカイブを通じて個票データも公開されている。SSM 調査以外にも、日本版総合社会調査(JGSS)や全国家族調査(NFRJ)など、社会階層・不平等と家族にアプローチできるさまざまな社会調査データが実施・公開され、そのなかには同一個人を追跡したパネル調査も含まれる。また、統計法の改正により公的統計の個票分析の道も開かれるようになった。国際比較に目を転じると、海外のデータ・アーカイブ等を通じて利用可能な国際比較調査も増えている。もちろん、こうした大規模な公開データだけではなく、質的調査を含む独自の社会調査も企画・実施され、それぞれの課題に取り組んでいる。

以上のような研究背景を踏まえ、不平等メカニズムの解明に新たな光を当てる独創的で挑戦的な研究を募集します。

実施方法

1. 公募に応じようとする会員は、エントリーシート(社会学評論所定の様式)を学会HPよりダウンロードし、必要事項を記入したうえで、特集①は2017年4月末、特集②は2017年7月末までに、社会学評論事務局(jpn_sr@yahoo.co.jp)へ電子メールで送付する。
2. 応募されたエントリーシートは、編集委員会の慎重なる討議により選抜され、6ないし7本の特集掲載候補が特集①は2017年6月末、特集②は2017年9月末までに確定される。
3. 編集委員会は特集掲載候補者に原稿の執筆を依頼する。原稿は、一般の投稿論文と同様、社会学評論の執筆要項および『社会学評論スタイルガイド第2版』にしたがうこと。
4. 原稿の提出期限は特集①は2017年8月末、特集②は2017年11月末までに、事務局まで完成原稿を電子メールで送付すること。提出された原稿は、公募という性格を考慮して、掲載することを原則としながら編集委員会の責任において査読される。
5. 査読が終了後、修正された原稿は、編集委員会の最終確認を経て、特集論文として掲載される。